



〒 242-0007 大和市中心林間 3-16-12 グリーンコーポ中央林間 107

電話 / Fax 046-272-8980 Email: toiwase@edventure.jp URL <http://edventure.jp/>

応援メッセージ

NPO化を目指す外国人当事者団体「すたんどばいみー」へ

「社会」に対する一つの確固たる像(イメージ)があります。真実といってもかまわないかも知れません。それは、「弱い者の思いが達成される社会がより豊かな社会である」ということです。強い者の声は大きく、その思いはすぐに達成されます。しかし、そうであればあるほど世の中には偏り(かたより)が生まれ、その偏りが、強い者の声をさらに大きくし、弱い者の声を小さくしていきます。

こうした真実を、私たちは心のどこかでいつも理解し、追い求めるべき姿として思い描いています。しかし、一方では、このことがとても困難なことである事も理解しています。そのため、できれば少しでも「強い側」に自分自身がいることができるように振舞おうとするのです。偏りが、自分にとって少しでも有利に働くよう腐心することになるのです。このことは自分のなかで、なかなか否定できないこととして、日常の意識の真ん中を占めてしまっています。

でも、心のどこかでは、偏りのない社会が本当の「公共」を生み出す基盤であり、「幸せ」につながるものと分つていきます。だから、自分の中のその小さな声をすくい上げて、ちょっぴり誰かのために働きたい気持ちになったり、弱い者の声を聞かなければいけないと思ったりするのです。

しかしこうした善意(?)も、「弱い者」の立場に押し込まれている者にとっては、何の役にも立たないかもしれません。偏りの激しい社会では、弱い者の小さな声でさえ、自らのものにできないシステムになっているのですから。何かを感じても、それを声にするためには、想像を絶する葛藤と軋轢を乗り越えながら、自分たち自身の思いを表現できる「ことば」を獲得するしか道はないのです。しかも、自分自身の思いをことばにして獲得し続けなければ、彼ら／彼女らは社会にまぎれ、無意識のうちに「強い者」を支えるパーツとして溶け込んでしまうことになるのです。

外国人として日本で生きる子ども達は、まさしく「弱い者」の立場にいます。外国人の子ども達が当事者団体として活動してきた15年にわたる「すたんどばいみー」の歴史は、まさしく自分たちのことばを獲得し続けようとする葛藤の歴史であったと思います。学校の中で、家で、社会で、つぶれてしまいそうになる外国人の子どもたちの一人ひとりに寄り添い、ささえ、はげまし、そして自分たちのことばを編んできました。そして少しずつ、彼ら／彼女らは言葉を蓄積してきました。誰のために? そう、同じ日本で外国人として生きる子どもたちのために・・・!

そして今、彼ら／彼女らは「すたんどばいみー」のNPO化に向けて準備をしています。自分たちの活動が、日本社会の中でしっかりした運動としてこれからも歩み続けて行かれるように・・・、やがて来る次の世代の外国人の子どもたちにしっかり引き継ぐことが出来るように・・・、そんな思いのもとに、新たな一歩を踏み出そうとしているのです。

「弱い者の思いが達成される社会がより豊かな社会である」という真実を私たちは証明しなければなりません。すたんどばいみーは、精一杯声をあげ続けるでしょう。しかも、NPOとして、その言葉はこれからは、日本社会に向けても発せられることになるのです。私たちがその声を、どのように受け止めていくのか・・・Ed.ベンチャーや日本の社会が問われることになりそうです。



「労働教育」の取り組みを始めて・・・!

講師:高須裕彦氏(一橋大学大学院社会学研究科) 場所:富士見文化会館

- 6月22日(水)19:15～ **講演会** 「若者たちの労働実態と求められる労働教育の視点」
- 7月27日(水)19:00～ **模擬授業** (受講者を生徒とした高校生向けの模擬授業です)

「俺、働きたくない。めんどくさいもん。」受け持っている子どもからこう言われると、担任としては結構ショックなものだ。子どもたちが言う「めんどくさい」をどのように捉えたらいいのだろう。単純に「大変さ」をそういった言葉に変換しているだけなのだろうか。

昨年度「労働法と学校教育のつながり」をテーマとした学習会に参加した。そこで、ニュースでたびたび話題になるブラック企業の実態を知った。ブラック企業とは、「使い捨て」を前提として若者を採用する企業の事である。こういった企業が蔓延する背景には、若者の「貧困」があるという。

平成26年度時点で社会人の4割が非正規雇用者である事実を知っている人はどのくらいいるのだろうか。私も初めて知り、とても驚いた。低賃金労働者が増えることで、生活保護を受ける家庭が増えている。親の貧困は、もちろん若者の貧困にもつながっている。進学に伴い生活費や学費が必要になるが、頼りにしたい奨学金制度は、今や利子付のローンを組む仕組みになっている。仕送りもあてにできない学生は働かなくなっているのである。就職を考える時も、借金返済のため、非正規雇用の回避のため、「入れる会社にとりあえず」就職してしまうのである。その会社がどんな悪条件であるにも関わらず、だ。過酷な労働を強いられても、違和感を感じず、気付いたら精神を病むまで追い詰められている若者がいる。「めんどくさい」と発した児童は、こういった現実を肌で感じていたのかもしれない。

この負の連鎖を断ち、現実の労働状況の中で生き抜き、戦う力を身につけてもらいたい。そう思い、今年度「労働教育」の授業研究会を発足した。労働に関する知識を身につけることで、違和感に気づき、身を守ることができるのではないかと考えたのである。私自身も知識が必要だったため、3・4月に講師を招き、学習会を行った。主に高校生以上を対象として行われている「労働教育」では、労働法に触れながら、労働時間の規定や正式な雇用契約の仕方などを学ぶこと、終身雇用と年功序列を前提とした給与体系が浸透している背景が日本型雇用で反映されていることを知った。

今後は、「若者たちの労働実態と、求められる労働教育の視点」をテーマとして6月に一橋大学大学院の先生を招いた講演会を予定している。そして、子どもたちがこの社会を生き抜く力を身につけるために、「労働教育」を、小中学校段階から行う可能性について探っていきたいと考えている。

この研究が、「めんどくさい」社会を「生きやすい」社会に変える第一歩になると信じ、教員として様々な可能性を考えていきたい。(M)



理論学習会のお知らせ

※詳細はホームページでご確認ください。

6月6日(月) 19:15～21:00 @富士見文化会館 101号室

テキスト『つながりを煽られる子どもたちーネット依存といじめ問題を考える』(土井隆義、岩波ブックレット)の文献講読による学習会を行います。ご参加お待ちしております!

【理事の独り言】「武器輸出三原則」が「防衛装備移転三原則」に変わってしまった後、その筋の市場は活気づいているという。いつの間にかこの国は軽空母並みの戦闘艦を4隻も擁し、某国には潜水艦を売り込み、ついには純国産の戦闘機を飛ばす始末。さる大統領候補が「核武装」などという物騒極まりない言葉をほのめかせば、それに乗じて改憲や安保の見直しについて観測気球を上げている。そうした中での「教育の強靱化」である。「強靱な教育」って何だ!と、大きな声を上げて問いかけたい。目新しい言葉に惑わされることなく、それが何を指そうとしているのかしっかりと見極めたい。(TH)